第9回

「荻窪の記憶」こぼればなし

インドと荻窪

「〈チャンドラ・ボース閣下が日本に上陸されました！〉って、そのツルさんの声、今でもよく覚えています。その夜は明日のこと考えて皆で寝られませんでした。今考えると変ですけど、皆んなインド人なのに、日本の家でふとんに寝ながら、日本語で明日のインドのこと喋っていました。」

チャンドラ・ボースとは、高円寺の蓮光寺に遺骨が安置され、銅像も立っているのでご存知の方も多いと思うが、マハトマ・ガンジーと並ぶインド独立の闘士。反英米の日本と共闘して独立を勝ち取るため、滞在先のヨーロッパからドイツと日本の潜水艦を乗り継いで、1943年5月、日本に上陸した。

その知らせに歓喜した思い出を語るのは、当時15歳だったアシャ（日本名、朝子）。インドと日本を行き来する独立運動の活動家サハイの長女で、母、妹のツルとベビ、弟のアショークと、「省線のオギクボから二丁ほど上がった所に借家住まいして」いた。朝子は神戸生まれで、日本で教育を受けたため、英語もインドの言葉も苦手で、中野にあった昭和高等女学校に通い、和歌や習字が好きだった。

戦時中、外国人には特別の配給があったが、一家は「自分らが外国人と思っていませんでしたから日本人と同じ普通配給をお願い」して、空腹や空襲の恐怖に耐え、桃井第二国民学校（現在の桃井第二小学校）に通うベビとアショークは日本人生徒と一緒に長野へ疎開した。

インド国民軍婦人部隊の制服を着た朝子
「インド独立の志士『朝子』」より

やがて、16歳になった朝子はボース率いるインド国民軍への入隊を認められ、父とともに日本軍の飛行機で、台湾、サイゴンを経由してバンコクに渡り、婦人部隊に入隊。ジャングルで厳しい訓練を受けるが、日本の敗北によってインド独立の夢は遠のいた。

以上、桃二小90年の歴史とも重なると考え、紹介した次第です。

「荻窪の記憶」プロジェクト　松井和男

引用・参考文献　笠井亮平「インド独立の志士『朝子』」白水社
安引宏「カルカッタ大全」人文書院